

## 助成事業実施報告書

団体名 特定非営利活動法人あそびとまなび研究所  
 代表者・役職名 氏名 理事長 秋葉 祐三子

### ▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

### 1. 助成プロジェクト名

みんなでたべよう あそぼう まなぼう 子ども食堂あーぶくたった

### 2. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度

コロナ休校後、大学キャンパス内の屋外で、ずっと活動している子ども食堂「あーぶくたった」今年で8年目になります。週2-3回のフードパントリーはあちこちお出かけしながら継続中。いろいろなところにフードドライブボックスを置いていただき、近隣農家さんに野菜をいただいたり、お米をいただいたりしながら活動しています。地元の季節の野菜を、お料理して食べます。キャベツやブロッコリー、トマト、たけのこ、たまねぎ、、一年中いろんなお野菜をいただきます。七夕や、ハロウィン、クリスマス、バレンタインなど、季節の遊びもみんなで楽しめます。活動支援や進路相談なども随時行っています。

### 3. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度

結果 活動を継続できた。休むことなく毎週2-3回のフードパントリー、月2-3回の子ども食堂や弁当配布を継続。参加者概数約13000人内半分が学生など若者を含む子供。  
 コロナ禍で人に出会うことが難しかった中、小さなコミュニティがしっかりと生み出された。毎週毎回60人-100人の参加者があり、留学生や学生、0歳児から高校生、地域住民など様々な参加者があった。コロナワクチン会場が目の前に設置されたため会場でチラシを配布し、周知を図ったところ参加者が増えた。コロナ禍にあって、子供達の日常を守ることができたことにとっても感謝している。結果的に食ロス対策となり、県のフードロス表彰、市の3R表彰、SDG'sアワードをいただくなど、活動が各所で認められたことも周知されることに役立った。

### 4. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字程度

コロナが少し落ち着いたことで、コロナ休業などの支援がなくなり、公休扱いをされない職場も少なくなく、一度感染すると出港停止、業務停止状態になり、結果世帯の収入が激減してしまうようです。子育て家庭と日常的に会話を交わすことができる活動となっていて、お話をしにくる楽しみもあるようです。コロナが明けても学校に行きたくない子供も増えていて、学校以外の親子の居場所が必要です。季節のイベントや、おたのしみをたくさん用意することができました。今後も取り組みを継続していきます。

### 5. 参考資料

プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等のデータ。活動の様子がわかる写真などを必ず別途ご提供ください

